

<信州の奇祭>

<節分>に示されているように、愛知県ではとても珍しい奇祭（珍祭）があるが、信州にもそれに勝るとも劣らない奇祭がある。諏訪大社の御頭祭（おんとうさい）と御柱祭（おんばしらさい）である。特に御柱祭は 7 年毎に盛大に行われるが、それに先駆けること 1 年前には、これもまた 7 年に一度の善光寺の御開帳がある。では、これらを深く考察してみよう。

(1) 善光寺の御開帳 (<http://www.gokaicho.com/about/gokaicho.php> より)

2015 年は 7 年に一度の御開帳がある。御開帳とは、通常未公開の秘仏が公開されることで、善光寺では秘仏である御本尊の身代わり前立（まえだち）本尊を本堂にお迎えして行われる。

善光寺の御本尊は一光三尊（いっこうさんぞん）阿弥陀如来で、1 つの光背の中央に阿弥陀如来、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩が並ぶ。鎌倉時代に御本尊の御身代わりとして前立本尊が造られ、それを 7 年に一度の御開帳の時だけ、特別に拝観できる。

中央の阿弥陀如来の右手に結ばれた金糸が途中から五色の糸に変わり、白い善の綱として、本堂前の回向柱（えこうばしら）に結ばれる。その回向柱に触れることは、前立本尊に触れるのと同じことで、計り知れない功德があると見なされている。

回向柱とは卒塔婆の一種で、御開帳期間中に本堂前に立てられる高さ約 10 メートルの柱である。

阿弥陀如来は、本地垂迹説では熊野権現と八幡神である。熊野権現では国常立神だが、これはウシトラノコングジで、原型はイナンナである。

八幡神は応神天皇、比売神、神功皇后だが、これは秦氏が王権を委譲されて以後の話で、本来の八幡神は中心に祀られる比売神である。比売神は宗像三神で、古代縄文の航海の女神であり、太陽女神であり、豊穡の女神でもあるイナンナが原型である。

すなわち、阿弥陀如来とは、イナンナを原型とする。故に、イナンナの別名アシェラ＝アシラからラテン語読みで “h” が抜けたハシラを本尊同等と見なすのである。太陽女神だから “善き光の寺” であり、イナンナは性に奔放だったから、“御開帳” である。そして、“牛に引かれて善光寺参り” だが、牛はエンリル一族のシンボルであり、イナンナはエンリルの孫である。

(2) 御頭祭

① 御頭祭

諏訪大社には本殿が無く、背後の守屋山が御神体である。この “もりや” という名称に惹かれ、イスラエルの十支族帰還運動組織アミシャブのトップであるアビハイル氏なども訪れて祈りを捧げている。ということは、この守屋山は、旧約の創世記で主がアブラハムに息子イサクを犠牲として捧げるよう命じた “モリヤの地” の象徴とも言える。

この諏訪大社では、御柱祭に代表されるような数々の奇祭が行われるが、中でも、毎年4月15日に上社の前宮で行われる御頭祭は異彩を放っている。

現在の御頭祭では、約1.5メートルの御贅柱（おにえばしら）という木の柱と、剥製の鹿の頭が3頭供えられる以外は、一般的な神事と何ら変わりはないが、明治時代までは、かなり変わった神事が行われていた。

御頭祭-1



御頭祭-2(御贅柱)



鹿の頭を75頭供え、その中には必ず、耳の裂けた鹿があったという。他の供え物としては、白鷺、白兎、雉子、山鳥、鯉、鰯、鮒などの肉、米、海老、魚など、数多くの獣類がある。

まずは、神官たちが供え物を下ろして食べ、酒を酌み交わす。その後、御贅柱を飾り立て、神の代わりともされる、紅の着物を着せられた御神（おんこう、おこう）という8歳ぐらいの子供がこの柱に縛り付けられる。神官がこの御神を小刀で刺そうとした瞬間、諏訪の国司の使者の乗った馬が登場してそれを止めさせ、御神は解放され、祭りは終わる。

神道では、獣のような血に関わるものは“穢れ”とされているので、このような祭りは奇怪である。しかし、“もりや”にあやかるならば、ユダヤ教に於ける犠牲の仔羊の血を神殿に捧げたりすることと似ているとも言える。（“犠牲”は牛偏で、ここでも牛の関わりか？）

前述のように、“もりや”という名称はアブラハムとイサクに関わっている可能性がある。旧約では、主はアブラハムの信仰心を試すため、息子のイサクを生贄として奉げるよう命じたが、アブラハムが命じられる通りに行動したので、主の御使いが止めさせた。また、この時、木の茂みに1匹の雄羊が角を捉えられており、それを生贄として奉げた。これは、75頭供えられる鹿の中には必ず耳の割けたものがあった、ということで象徴されているとも考えられる。

しかし、これだけでは“75 頭”の意味が説明できない。一説には、北イスラエル王国のサマリアにあるゲリジム山で子羊の生贄を行う際、75 頭を屠っていたと伝えられている。申命記に依れば、ゲリジム山はシメオン、レビ、ユダ、イサカル、ヨセフ、ベニヤミンが民を祝福するために立った山で、サマリア人がこのゲリジム山に神殿を建てていたことが歴史家ヨセフスによって記録されており、エルサレムの神殿よりはるかに古いものである。サマリア人は今でも生贄をゲリジム山で屠ったりしており、ユダヤ教徒の祭儀よりも、より聖書に忠実だと言える。

他には、新約の使徒言行録に、ヨセフがヤコブと 75 人の親族一同を呼び寄せた場面があるが、旧約の出エジプト記では、ヤコブから生まれた者の総数は 70 人、とあるので、数字に矛盾がある。そこで、鹿に着目すると、鹿は神の使いとされ、ヨーロッパでは鹿の角はイエスが掛けられた十字架と見なされている。故に、王侯貴族は狩りで鹿を追い詰めることにより、イエスの受難を追体験すると考え、鹿狩りが盛んに行われた。

“75 人の親族”と書かれているのは使徒言行録だから、象徴的に“75”を“イエスの使徒”と見なしているとしたら、血が滴る鹿の頭は、十字架上で血を流していたイエス、という暗示だと言える。

そうすると、御頭祭での鹿はユダヤ教由来ではなく、キリスト教由来ということになる。イエスの受難（十字架刑）はユダヤ暦ニサンの月の 15 日であり、これは新暦では 3 月～4 月に相当し、御頭祭は新暦 4 月 15 日に斎行される。また、諏訪湖では冬に御神（おみ）渡りという現象が見られる。これは、凍っていく氷が盛り上がる現象だが、諏訪大社上社の建御名方命（タケミナカタノミコト）が下社の八坂刀売命（ヤサカトメノミコト）に会いに行った足跡とも、土着神ミシャグチが通った跡とも言われているものの、新約には、イエスが湖の上を歩いたという記述があり、これを重ねることによってイエスを暗示していると思われる。

前述の御贄柱にしても、8 歳ぐらいの子供がこの柱に縛り付けられるが解放されるのは、イエス磔刑を暗示している可能性があり、“8”はイエスが誕生した時に天空に輝いたとされるベツレヘムの星の暗示でもあろう。

そして、イエスの原型は木に掛けられて復活したイナンナであり、イナンナのシンボルは八芒星で示される金星であり、イエスは明けの明星である。また、柱はアシェラ＝アシラで、イナンナの暗示である。

②ミシャグチ神

さて、ここにはこの地方の歴史をまとめた守矢史料館が守矢家の敷地内にある。守矢家の祖先は、建御名方命が諏訪に来た以前からの土着の神、ミシャグチ神と言われ、代々続いてきた神官の家系で、現在の当主で 78 代目になる。

敷地内にはミシャグチ神を祀る社があり、ミシャグチ＝“御イサク地”と解釈するならば、やはりイサクとの関わりが伺われる。しかし、ミシャグチ神は蛇神とされており、イサクもアブラハムも蛇神ではなく、ユダヤ教やキリスト教では、蛇は悪の存在である。（しばしば、クリスチャンが“御イサク地”と言

って喜んではいらぬものの、自分たちの言っている矛盾に気が付いていない。) 蛇が神様扱いなのは東洋だが、人類初の文明とされるシュメールでは、蛇は神様だったり悪だったりする。また、先ほどの“サマリア”もヘブライ語では“シヨムロン”と言い、本来の意味は“小さなシュメール”だから、シュメールとの関わりが伺われる。

また、伝承ではミシャグチ＝“御社宮司”で、神官だとも言われているが、“御シャクティ”の変化したものと解釈するならば、シャクティは宇宙を創造し、動かしている根源のエネルギーで、クンダリーニの蛇として喩えられるのは当然である。あるいは、御神酒と書いて“おみき”と読むように、“ミ”に“神”を充てるならば、“神シャクティ”となり、まさしく宇宙根源のエネルギーということであり、それは国常立神で、ウシトラノコンジシ＝イナナである。更に、シャクティはシヴァの女性原理でもあり、シヴァの原型はイナナだから、ミシャグチ神は豊穰の女神イナナだと言える。そして、この御頭祭は春に行われるから、生命の息吹たるシャクティは豊穰の女神に相応しい。

さて、史料館の館内には、かつて供えられていた生贄の剥製など（ウサギの串刺しの剥製、鹿の頭の剥製、鹿の脳みその和えた模型など）が展示されている。このようなウサギを串刺しにしたり、鹿の脳みそを和えたりする風習は、ユダヤ教やキリスト教には無い。この地は縄文時代の遺跡が数多く出土していることから、明らかに、狩猟による肉食が盛んだった縄文人の風習だと考えられる。つまり、農作物ではないが、これもまた豊穰（自然界の恵み）を祈るもので、やはり縄文時代の最高神で豊穰の女神、イナナに対する祈りである。

生贄のウサギ模型



ミシャグチ神



このように、御頭祭は縄文人の神祭りを基本とし、そこにシュメールやユダヤ教、キリスト教が重ねられた、極めて複雑怪奇な神事となっている。

②守矢家の軒先

守矢家の軒先には十字架の御紋がある。島津家の家紋に類似しているが、ギリシャ神話の海神ポセイドンのシンボルであり、ポセイドンの原型はエンキである。また、占星術では地球のシンボルであり、エンキは地球の主である。

よって、海洋民安曇氏が海神で地球の主エンキを崇めている暗示である。エンキのシンボルは蛇でもあり、ミシャグチ神が蛇神なのはそういうことである。

守矢家軒先の十字架



③北斗神社

前宮と本宮の間には、北斗神社がある。御祭神は天御中主命（北極星）とあり、この神は古事記での原初の神である。従って、“神シャクティ”とも言える。

また、北極星は天に於ける不動の星だが、古代支那では“太一”と言い、天照大神を祀る伊勢神宮の称号でもある。そして、元伊勢籠神社の極秘伝に依れば「天御中主命 亦名 天照大神 亦名 豊受大神」で、豊受大神はイナナだから、“神シャクティ”と合わせてやはりイナナである。

(3)御柱祭

①開催年

諏訪大社と言え、やはり御柱祭である。御柱祭は7年毎に行われるが、7年に一度の年とは、寅と申の年である。トラはイナナのシンボル、サルは智慧の神ニンギシュジツダ（トート神）のシンボルである。既に2014年から御柱の見立てが始まっており、祭りが行われる2016年は丙申（ひのえさる）である。丙は火性の陽に割り当てられており、不死鳥で火の鳥フェニックスの属性で、文字としては脚が張り出た台を形取ったもので、そこから芽が地上に出て葉が張り出て広がった状態の意味だから、豊穰の祈りでもある。すなわち、いずれもイナナの性質である。

これからすると、御柱祭の前年に行われる善光寺の御開帳は、御柱祭の露払い的な役割と言える。

②御神木

木曾の山から御神木のモミの木を3月に切り出し、4月の山出しに始まり、木落とし、川越し、里曳きと続き、建御柱（たておんばしら）で境内に御柱が立てられる。

モミの木と言えば、クリスマス・ツリーが思い浮かぶが、クリスマス・ツリーの原型は、古代ゲルマン民族のユールという冬至の祭りで使われていたモミの木で、冬でも葉が枯れないので生命の象徴とされていた。つまり、「生命の樹」である。

そして、冬至は太陽が復活する日と考えられている。「生命の樹」で“復活”と言えばイエスだが、その大元はイナンナである。

③四隅の柱

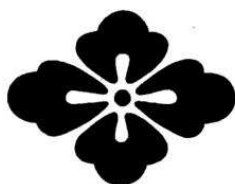
御柱は上社の本宮と前宮、下社の春宮と秋宮の四隅にそれぞれ立てられる。境内の四隅に柱を立てる理由として、この地に追われた建御名方命（タケミナカタノミコト）を封じるための結界とも言われ、また、神長官（じんちょうかん）の守矢氏の伝承に依れば、土着神ミシャグチの依り代であるとも言われ、縄文の祭祀とも言われている。

縄文の祭祀で柱を立てる、というのは、確かにこの付近は縄文の遺跡が多いので、可能性が高い。縄文時代など古い時代の柱は木製が多く、彫刻などの飾りが付けられているものがあり、その典型が、世界的に見るとインディアンのトーテムポールである。

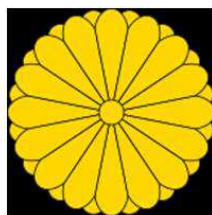
トーテムポールは内と外との結界であり、神域や集落の境界に立てられている。その上には大概、鳥が乗っているが、これは鳥が天と地を結ぶものであり、鳥を天（神）からの使者と見なせば、神域と俗域との結界となる。

アメリカ大陸を含む環太平洋地域の文化と、縄文文化は環太平洋文明圏を形成していたので、同じような柱を立てる風習はあって然りである。しかし、これだけでは、社の四隅に立てるという理由にはならない。

根本は、エゼキエル書に登場する“神の戦車メルカバー”である。4つの柱の中心には神の社があり、まさしく神の戦車である。これは神宮の御紋で暗示され、これが4つの宮になれば16本で、皇室の十六弁八重表菊紋の暗示であり、原型はロゼッタ（ロゼット）で、ナツメヤシの花の象徴であり、イナンナのシンボルである。これが後に中東のモスクやインドのタージマハルなどで、神殿の四隅に柱を立てることに繋がる。



神宮の花菱



十六弁八重表菊紋



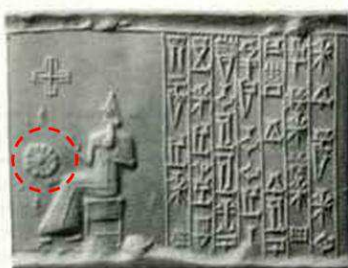
タージマハル

また＜節分＞に詳しいが、目の数に比べると、4本の柱は4つ目に相当し、真理を悟り、宇宙創造のエネルギー（起源意識、シャクティ）と一体化した状態の暗示である。この状態に至るには、すべての存在が起源意識の一部であり、それが起源意識全体を構成しているという自覚をすべての高等生命体（＝人類）が持つことが不可欠である。

ここで神宮の花菱御紋を見ると、中心の十字と丸が日本を暗示し（陰陽的に十字が四角と同等で日の丸となる）、4つ目に至るための中心となる国は日本であり、最終的に日本が世界の盟主になるということを暗示している。

ロゼッタの例-1

シュメールの粘土板



バビロンのイシュタル門

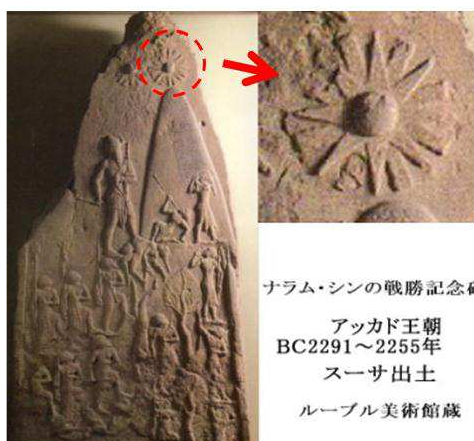


ツタンカーメン王の墓からの出土品

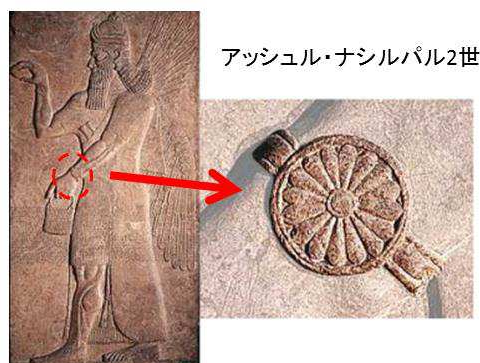


<http://wave.ap.teacup.com/renaissancejapan/242.html> より

ロゼッタの例-2



ナラム・シンの戦勝記念碑
アッカド王朝
BC2291～2255年
スーサ出土
ルーブル美術館蔵



アッシュル・ナシルパル2世

新潮古代美術館1、オリエントの曙光、1980.9.15より

④御柱祭

御柱祭の最大の見どころは木落としで、氏子の男たちが乗った御神木を山の斜面から落とす、極めて勇壮な祭りである。上社の御柱には目処梃子（めどて

こ) という角のような V 字型の木が御柱の前後に付いており、氏子たちはそれにしがみつき、V 字を保って美しく落ちることに主眼が置かれる。

この目処梃子は、70 度でもなく 90 度でもなく、80 度の角度を成している。カバラで“80”を解釈すると、“ $8+0=8$ ”となって、日本に於ける聖数となり、イエスが誕生した時に輝いたとされるベツレヘムの星（八芒星）、イエスの“輝く明けの明星”＝金星、美の女神ヴィーナス＝イナンナのシンボル、金星の象徴である。また、16 本の柱はこの倍で、“ $1+6=7$ ”はユダヤ教では神の数字と見なされており、7 年はそれに該当する。

対する下社の御柱には目処梃子が無い。その分、しがみつく男たちは大変だが、上社も下社も、最後まで振り落とされず、無事乗り切った男は英雄と見なされる。

木落としー上社



木落としー下社



<http://image.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E5%BE%A1%E6%9F%B1%E7%A5%AD>

この柱を、古代イスラエルに於いては異教の女神アシラの象徴だったことから、アシラの祭りだと言っている人もいるが、諏訪大社は諏訪の国の一宮で、一宮はその地域の中で最も社格が高い神社のことである。仮に、神道がユダヤ教と密接な関係があるとしたら、ユダヤ教では異教崇拝を厳しく禁じているので、異教の女神に関係する祭りがそれほど格の高い神社で盛大に行われていることは、明らかに矛盾している。これは、前述の“御イサク地”と同様な矛盾である。

では、この祭りの本質は何なのか？柱を女神アシラの転訛と見なすならば、アシラ＝アシェラはアッシリア由来で、アシュタルテ＝イシュタル＝イナンナのことである。イナンナはシュメールの豊穡の女神で美の女神であり、ヴィーナスの原型だから、イエスと同じく金星がシンボルである。そして、愛の女神でもあり、世界中の聖婚儀式の原型でもある。

シュメール神話に依ると、後のバビロンの主神となるマルドゥクの策略により、イナンナの婚約者ドゥムジが死んでしまった。ドゥムジの遺体には赤い経帷子（きょうかたびら）が着せられたが、イエスは赤い外套を着せられ、茨の冠を被せられた。ドゥムジの遺体は“眠りから覚める日”を待つために洞窟の横穴に葬られたが、イエスは処刑後に洞窟の横穴に葬られ、3 日後に復活した。

このように、ドゥムジの逸話は、イエスの原型である。

イナンナはドゥムジの復活を幻想し、多くの者を床に誘っては交わり、朝まで死なずにいた者が“英雄”とされ、復活したドゥムジと見なされた。これが聖婚の元となっている。そのイナンナがドゥムジを呼ぶ時の愛称がアドナイ（＝私の主人）、あるいはアドン（＝主人）だった。アドナイはヘブライの神“YHWH”の他の書き方であり、アドンはそのフェニキア語で、フェニキアの最高神はイナンナだった。（ドゥムジは旧約に於いてタンムズとされ、“神の戦車メルカバー”が登場するエゼキエル書には、エルサレムの女性たちがタンムズのために嘆き悲しんでいたことが記され、非難の対象となっている。しかし、皮肉なことに、ユダヤ暦の4月はタンムズの月とされ、御柱祭は新暦4月から盛大に行われる。）

この“アドン”に着目すると、興味深い事実が浮かび上がる。諏訪の地域は安曇野に近く、一帯は古代の海洋系豪族である安曇（あずみ）氏が関わっているのではないかとされている。“安曇（あずみ）”は“あどん”とも読め、滋賀県にある安曇（あど）川からも解るように、“あど”とも読める。この“あどん”や“あど”がフェニキアの“アドン”由来ならば、フェニキアは海洋国家なので、安曇氏が海洋民であることは矛盾しない。

そして、フェニキアの主神はアシュタルテ＝イシュタル＝イナンナ＝アシェラだから、“安曇”というキーワード共に、御柱祭はイナンナとドゥムジの聖婚を暗示していると考えらる。

つまり、御柱がイナンナならば、それを乗りこなした男は英雄ドゥムジで、御柱祭は聖婚儀式の再現ということになる！男たちは清めた柱に乗るわけだが、神道では清めた後に人が乗ったりすることは禁じられている。これも、御柱が奉納する柱ではなく、イナンナを暗示しているからだと思えば、矛盾しない。

また、この祭りでは必ずと言って良いほど死者が出るが、新しく柱を切り直したりはしない。神道に於いて、死は最大の穢れだから、普通なら切り直す。しかし、そうしないのは、イナンナとの聖婚の一部だから、と思えば、これも矛盾しない。

更に、先ほどのトーテムポールは1本柱だが、1本柱で有名なのは、エジプトのオベリスクで、その先端には、不死鳥フェニックスが留まるとされている。フェニックスの語源は“フェニキア人”であり、フェニキア人とは、主神のアシュタルテ＝イナンナに生贄として捧げられた聖王のことでもある。ならば、立てられた柱は、女神イナンナが降臨する依り代と言える。また、フェニックスはイナンナが好物だった「生命の樹」、ナツメヤシの学名でもある。

以上、善光寺、御頭祭、御柱祭は、柱によってイナンナを暗示していると言える。そして、聖婚も暗示するが、2014年に出雲（地祇）と皇室（天神）の婚姻があったことは、神々の聖婚に先駆けて、地上での天地合一の婚姻が行われたと見なすことができる。つまり、準備が整った、ということである。

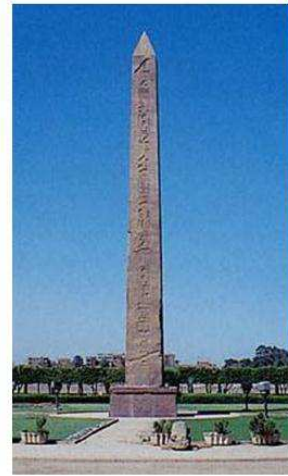
建御柱



御柱



オベリスク



http://okamoto-shoji.jp/heliopolis_j.htm